

公表

放課後等デイサービス事業所における自己評価総括表

○事業所名	運動療育型児童デイぼうらの樹東住吉		
○保護者評価実施期間	R8年 2月 2日		～ R8年 2月 18日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	20	(回答者数) 15
○従業者評価実施期間	R8年 2月 2日		～ R8年 2月 18日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	7	(回答者数) 7
○事業者向け自己評価表作成日	R8年 2月 19日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	学校生活に直結するSST・学習姿勢・自己管理を支援できる	学校場面を想定したルール理解・切替・時間管理を日課や活動に組み込み、成功しやすい課題設定と具体的な称賛で定着を図っている。生活・学習のつまづきは小さな目標に分け、できた経験を積み重ねられるよう支援している。	学年・特性に応じた自己管理スキルの段階表を作成し、個別支援計画の目標と日々の支援を紐づけて評価する。学校での困りごとに直結するプログラムを体系化し、家庭でも同じ関わりができる支援ツールを整備する。
2	友だち関係・集団参加の練習を場面ごとに設定しやすい	集団活動ではルール・役割・順番を明確にし、トラブルが起きやすい場面を想定して事前練習や振り返りを行っている。必要に応じて少人数から始め、段階的に集団参加へつなげている。	対人スキルをテーマ別に整理し、ロールプレイ→実践→振り返りの流れで継続できるSSTプログラムを整備する。トラブル対応は予防と再発防止の観点で記録様式を統一し、対応の一貫性と共有力を高める。
3	保護者・学校との情報共有をもとに、学校→事業所→家庭の一貫支援が組める	連絡帳や送迎時の共有、面談等で家庭・学校の状況を把握し、困りごとを整理して支援目標に反映している。支援で有効だった関わりを家庭でも再現できるよう具体的に伝えている。	学校・家庭・事業所で共通化できる「支援のコツ」を1枚にまとめ、定期的に更新する運用を作る。必要ケースでは学校や関係機関との連携機会を計画的に確保し、移行期に向けた引継ぎ資料の整備を進める。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	学年差・特性差が大きく、集団活動が「合わない児童」が出やすい	学年や特性、刺激耐性、目的を踏まえてグループ分けや活動内容を調整し、参加が難しい場合は少人数・個別から段階的に合流できるようにしている。見通し提示やクールダウンの手順を用意し、混乱時の対応を共通化している。	グループ編成の基準を明文化し、定期的に見直す仕組みを作る。活動はレベル別に複線化し、選択肢を確保する。トラブル予防のルール提示・記録・振り返りを標準化し、支援のぶれを減らす。
2	宿題支援や学習支援の方針がぶれやすい	学習は「本人が自力で取り組める」ことを重視し、環境設定を整えた上で、声かけやヒントの出し方を意識して支援している。宿題量や難易度は家庭と共有し、無理のない範囲で進めている。	学習支援の方針を文書化し、全職員で共通理解を持つ。宿題支援は「計画→着手→継続→見直し」の手順をチェックリスト化し、記録により支援量の調整を行う。必要に応じて学校・家庭と連携し、課題量や合理的配慮の相談につなげる。
3	進学・思春期・将来(自立/就労)を見据えた段階的支援の整理が必要	日々の支援の中で、自己理解、感情調整、対人距離、ルール理解などを場面に応じて扱い、本人の成功体験を積み重ねている。保護者とは進路や将来不安を面談で共有し、必要に応じて関係機関につなげている。	学年別の中長期目標のロードマップを作成し、個別支援計画に短期・中期・長期目標を組み込む。思春期テーマのプログラムを整備し、進学・移行期は引継ぎ資料とケース会議の実施を標準化して切れ目のない支援につなげる。